

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- ネパール極西部訪問レポート 1～3
- IRM(インドラサロワール)訪問/ネパール水害緊急募金のご報告 ... 4
- 楽しく多文化共生 5
- ラオスプログラム JVCラオスのセコン県での支援活動 6
- イベントに参加 幸せクラフトを販売 6
- ラオス図書プログラム/地球の木と私 7
- インフォメーション/活動日誌 8
- 編集後記 8

ネパール極西部訪問レポート



地球の木の支援がなかったら、今の私はありません

地球の木が1997年から12年間、ネパールNGO・SOARSニルマラさんたちと教育支援を行ったネパール極西部にもう一度行きたいというネパールチームの夢が実現した。オンライン会議で、ニルマラさん、顧問のシュレスタさん、リーダーたちや、地球の木オリジナル紙芝居の主人公デブラニさんと話し、彼女のサクセスストーリーのその後の進展や村の子どもたちが皆、学校に行くようになったことは聞いていたが、現地に行ってこの目で見たいと思った。

タル一族のお正月「マギ」に招待され、1月11日から15日に村々を訪問した。所狭しと並べられたご馳走、華やかな民族衣装をまとった女性たちの踊り、太鼓の演奏が私たちを迎えてくれた。

女性識字率5%から始めた識字教育

10クラスの識字教室支援からスタートした教育支援は、地域のニーズに応じて81クラスに及び、参加者は2,000人を超えた。一家に女性の識字者を1人つくるモデル村も実現した。今回出会った女性たちは懐かしそうに「デブラニ先生に鉛筆の持ち方を教えてもらったの」「実家では勉強させてもらえなかったけど結婚したら識字教室があって勉強できたわ」「数字が読めるようになって、役所のどの窓口に行ったらいいか分かったわ」と語った。識字教室参加者の子どもたちの多くが、今、高校、大学に進学している。

ミッションは社会貢献

今回、仕立て屋を営む3人の女性を訪問した。アサ・チョーグリさんは、識字教室を卒業してから裁縫教室で縫製を勉強し、2008年の最終調査の時にすでに起業していた女性だが、今では1,000人の顧客がいるという。現在も後輩に技術を教え続け、地方政府に頼まれて講師をすることもある。もう一人のカーガティ・カタリヤさんは、仕立て屋は競争が激しいが、町からわざわざお客が来てくれる。隣の敷地に家を建てる予定だ、と静かに語った。センスのいい服装をしていた。3人が自分の幸せだけでなく、人の幸せを考えて社会貢献して

いることが印象的だったので、ニルマラさんに聞くと、識字教育の段階から社会貢献の大切さを学んでいるとのことだった。

デブラニは今も皆のロールモデル

紙芝居の主人公デブラニさんの家を訪問した。彼女は識字教室を優秀な成績で卒業し、中学に入って識字教室の先生になった。村の女の子たちのあこがれの的だった。双子の子どもたちと共にデブラニさんが相変わらず恥ずかしそうに私たちが迎えてくれた。とても立派な家の周りにはジャガイモ畑が広がっており、家の裏の広い鶏舎は鶏を売ったばかりで空っぽだった。その後ろには大きな豚と小さな豚が2匹 餌を食べていた。奥の池では魚を育てている。看板が掛かっており、そこに「所有者:デブラニ・チョーダリ」と彼女の名前が刻まれていた。オンライン会議の時、「夫の名前ではなく自分の名前で会社の登録をしました」と、誇らしげに言ったのはこのことだった。デブラニさんの長女はカトマンズの大学でITの勉強をしている。

デブラニに続く女性たち

お正月の挨拶にデブラニさんの実家を訪れた時、末妹サンギータさんが駆け寄ってきて「あなた(地球の木)の支援がな

かったら、今の私はありません。ありがとう」と言った。彼女の仕立て屋を訪問した時は、質問に答えるだけだったサンギータさんは、9か月の識字教室の後、11歳で小学校3年に入り、学業を続けながら縫製の勉強もした。今は大学で教育学を学びながら、仕立て屋を営み、後輩にも教えている。



デブラニさん(中央)と双子の子どもたち

全ての始まりは識字教室

識字教育を9か月受けた後、400ルピー(当時の800円)を元手に野菜を売り始めたという47歳の女性、ゴーリ・カタリヤさんは、31歳で一念発起して小学5年生に編入し36歳で学校を卒業、今は立派な食品店を経営している。識字教室の先生から多くを学んだと言う。

思い返せば、内戦、王政廃止と激動の12年だった。そんな中でSOARSは、常に人々にとって何が一番必要とされているかを考えてプロジェクトを進めてくれたと思う。

(ネパールチーム 乳井京子)

モデル村だったニムディ村にて

「非識字者のいない村・水に由来する病気の無い村・経済的に自立した村」という3つの目標掲げていたモデル村、ニムディ村をリーダーのアルジュンさんの案内で訪れた。病気の撲滅は難しかったが、識字者を増やし、経済的に自立するという目標は果たすことができた。

コミュニティセンター

村に入ってまず驚いたのはまっすぐ伸びる美しい道路。道路を進み案内されたのは、ゴダゴリ農村自治体第3区の区役所。よく見ると、この建物はNPO法人取得記念として地球の木が60万円を寄付し、村人の手で造られた、煉瓦づくりの建物だった。活動拠点がほしいという村人の要望に応え建てられた。建物の前には区長をはじめスタッフが並び、歓迎してくれた。



区長(右端)、スタッフから歓迎を受ける

2015年に発布された新憲法の下、地方選挙で選ばれた区議会がスタート。区に十分な予算が下り、区ごとに事業を進めることができるようになった。

区長は、道路のおかげで他の地域から移住する人が増えた。識字を含むプロジェクトは、小さい活動だが、大きなインパクトがあった。人々、特に女性たちの生活を変えた。以前は書類に拇印を押していたが、今は署名ができる。一方、村の課題は若者の不在。村には仕事がない。起業するにも金利が16~17%ととても高い。政府が若者の起業を奨励するような政策を取ってくれるとよいのだが、と語ってくれた。隣に新しい区役所の建物が建っていて、移転後、古い建物は農業協同組合が使うことになっているそうだ。有効に使われているのが嬉しい。

コミュニティ・フォレスト

次に共同林に案内された。森林の管理を地域住民の参加によって行い、そこで得られる利益などを住民に分配するという方式である。私たちが識字教室を始める前、ニムディ村では村人総動員で苗を植えていた。それから30年、村民が順番に監視の当番を担い、管理してきた。今ではシソ、シマル、チャンディなどの立派な木々が育っている。売れば1本700万ルピーで売れるそうだ。森の保護、木や土地の利用方法についてアドバイスを求められた。

これからの展望

若者が流出する現状に対し、女性リーダーのラクシュミさんには考えがある。私たちがいろいろな場所に案内してくれ

た。その一つがりんご農園。農園主のオリさんは、インドでりんご栽培について学び、地元に戻って広大な土地にりんご農園を作った。冷涼な環境で育つりんごを温暖な土地で育て、新たな特産品を作るという挑戦だ。ここタライ平野は土地があり、可能性は十分ある。

青空野菜マーケット

週2回、広場で青空マーケットが開かれる。野菜を売っているのはほとんど女性たちだ。女性たちがこんなに経済活動に関わっているのは驚きでもある。楽しそうに買い物客とやりとりしている。ラクシュミさんに言わせれば、女性たちももっとビジネスを学び自立するべきだ。野菜と言えば、以前は村の人たちはあまり野菜を食べなかった。今、村を歩くと家の周りにはいろいろな野菜が植えられていた。キッチンガーデントレーニングの効果だろう。

ニルマラさんとシュレスタさんは村人たちに言う。「行政のやることをみんなでしっかり見ていきましょう。うまくいくようにみんなでサポートしていきましょう」
人々は以前とは違い、「賢く」なった。地域の利益を考えるより



野菜を売って稼げるようになった女性たち

は個人の利益を優先する人も増えてきた。どのように以前の勢いを復活させるか、それが難しいところではある。しかし、今回の再会で、村のリーダーたちも、SOARSの仲間も、そして私たちも先に進もうという大きな力をもらった。

(ネパールチーム 丸谷士都子)

極西部を訪問して～4人の感想～

30年経って女性たちが変わり、村が変わったのを見た。時代の流れもあるが、始まりは識字教室だった。ニルマラさんが2年後の選挙に向け、女性候補を応援する全国キャンペーンを繰り広げていくと聞いた。役人の倫理観を育てる運動と共に、社会を確実に変えていく行動力は見習いたい。今回の訪問が村のリーダーたち、そしてSOARSの元スタッフに次の行動を促す刺激になったと聞いた。私たちにも大きな勇気を注ぎこんでくれたことは間違いがない。(丸谷士都子)



これまで極西部での成果について、地球の木の内部からは聞いていたが、実際に現地に住民たちから生の声を聞いたことで、そのインパクトの大きさが分かった。識字教室をきっかけに多くの人の人生が劇的に変わり、地球の木が同地で愛され感謝されていることに感激した。最終日、ラクシュミに今後もみんなのモチベーションを保つにはどうしたらよいかと聞かれ、答えに窮したが、その本質的な問いに答えることが私の宿題になった。

(磯野昌子)

←ニルマラさん(右端)、シュレスタさん(右より2人目)と

17年ぶりの現地訪問で発見したことの一つに、ラクシュミという、偉大なリーダーの存在があった。私たちは、初めての調査で出会った、15歳の少女デブラニの成長に注目し紙芝居などで紹介してきたが、今回の訪問でデブラニの後ろにはラクシュミという女性がいて、地域の人々が豊かに、幸せになるよう惜しまぬ努力をしていたことが解った。彼女の演説は力強かった。そしてデブラニの進学にラクシュミが経済的支援をしたことが解った。(乳井京子)

「プロジェクト評価ではなく、ミッションを確認しに行きましょう」。ニルマラさんはそう語った。村々で出会った女性は、識字の学びを自分に留めずに家族や隣人に広めていると胸を張った。そうだ！12年のプロジェクト期間は終わっても、「幸せになる」ための、かれら自身のミッションとその成果は続いているんだ。カタリスト(触媒)として情熱をもって協働する地球の木とSOARSの活動から多くを学ばせていただいた訪問となった。(奈良崎文乃)



IRM(インドラサロワール)訪問～洪水のモニタリング調査から～

極西部訪問に引き続き、1月17～18日、地球の木の現在の支援地であるマグワンプル郡IRM市をネパールチームの有志が訪問した。首都カトマンズから車で3時間ほどの近郊であるがゆえに支援が少なく開発が遅れてきた地域であり、急峻な山肌に見事な段々畑がどこまでも続く。以前からでこぼこ道に土砂崩れがあちこちに見られたが、昨年9月の大雨による土砂崩れは想像以上に酷く、途中道路ごと崩落して川岸を水に浸かりながら進むこともあった。

湖があるこの地域では、大雨によるダムの決壊を防ぐために



生徒6人が犠牲となった学校

に放流をしたが、警報が届かずに逃げ遅れて生徒6名が亡くなった。サッカー留学で村外から来て寮に泊まっていた生徒たちだが、現場を見て、さぞ怖かったことだろうとあらため

て想像した。

今回は会員をはじめとする多くの方々から寄せられた洪水復興支援募金を、IRM市に手渡すことができ、とても喜んでいただけた。用途を指定しない方が使い勝手がよいため、寄付として渡したが、家を失った人たちの仮設住宅が半数しかないので、その建設の補助や食糧支援などに使用されると思われる。IRMにはニルマラさんも同行し、行政の人々に対するEthical Awareness(倫理観の意識改革)の話をしており、IRMの行政の人たちはとても興味を示していた。ニルマラさんとIRMをつなぐことができたことも一つの成果だ。

その後、2つの学校を訪問し、未来を担う頼もしい先生たちとお話した。また、この地域では若者の自殺が問題になっているため、各校のスクールナースや保健の先生を対象に社会心理トレーニングを行っている。曼荼羅のめり絵を用いた鬱症状の兆候の捉え方やロールプレイを用いてカウンセリング方法などを学んでいた。アーユルベータやヨガの瞑想なども取り入れており、ネパールらしい参加型のトレーニングが行われていた。(磯野昌子)

ネパール洪水緊急支援募金のご報告

地球の木では、2024年9月末にネパールで大雨によって発生した大規模洪水と地滑りの被害に対して緊急支援募金を行いました。

**総額455,536円 81名の方からご協力をいただきました
ありがとうございました！**

皆様からいただいた募金は、地球の木のパートナーNGO SAGUNを通して、IRM・ロシ両地域の地方行政による被災者のための支援に使用されます。仮設住宅の建設、道路整備、被災者の生活必需品に関する物資支援等が想定されていますが、実際の用途についてはあらためてご報告いたします。



市長に支援金を手渡す磯野さん(右端)

——目の前で体験したことを伝える難しさ——



濁流を目前に呆然とする男性

今回、9月に私用にネパールに滞在していた時、その大雨洪水を体験しました。自分が泊まっていた首都カトマンズの家の前

にあるナック川が氾濫。雨が降りしきる中、川の中州に取り残された十数人を救うため、何十人ものレスキュー隊が夜通しボートを出してクレーンやロープを使って救出活動を行っている光景を目にすることになりました。実際その状況を見るとその悲惨さや災害の恐ろしさ、災害に見舞われた方たちの無念

さが鋭く自分の心に突き刺さりました。と同時に、ネパール全土で200名を超える人が亡くなったこの災害が日本のメディアでどのように報道され、地球の木の会員にどのように伝わったかに興味が湧いてきました。

我々地球の木は、現地の声や現場の姿をできるだけ正確にお届けしようと努力していますが、もっとリアルに伝える工夫や方法が必要だと感じました。

会報誌やメールマガジンなどの文字による伝え方だけでなく「LINE」や「メッセージ」のようなリアルタイムに映像を提供するSNSツールを利用していくことを検討していく段階に来たのかもしれない。

(ネパール/ホームページチーム 勝田文隆)

神奈川区多文化共生ラウンジ「ネパールのことをもっと知りたい」

様々な文化を持つ人たちが共に暮らしていくためには、地域の人たちが理解を深めることが重要であると、多文化共生の地域づくりチームは考え、活動してきました。昨年3月、神奈川区多文化共生ラウンジが開設され、早速訪問しました。神奈川区に暮らすネパール人は**1,067**人、横浜市で2番目に多い数です。ネパール人コミュニティとつなぎ母語教室開催の可能性を探り、識字とネパールについて知る2つのワークショップを提案しました。

ラウンジ近隣の学校、自治会や民生委員から、ネパール人のことをもっと知りたいとの要望があるため、「世界を学ぼう！楽しもう！講座～ネパールってどんな国？」というワークショップを11月17日に実施しました。参加者は約30人。クイズから始まり、ネパールの暮らしの写真、普段使われている道具を当てるゲーム、ネパールの文字で名前を書くなど、会場はネパール一色となりました。ネパール人の中学生たちにも参加を呼びかけ、ネパール語のレッスンも担当してもらいました。

感想には、「視覚的情報が多く、効果的にネパールの知識の入り口に入ることができた」「ネパールのことは何も知らなかったけれど、ネパールに行ってみたいと思いました」「言語や民族が多様であり、日本よりも多文化共生が身近になっていると思いました。ネパールの子どもから、文化についてお話を聞けてよかったです」

ネパール人の参加者にも好評でした。「ほくは、今日の会でネパールのことをしょうかいしてくれて、とてもうれしかったです。ほくがしらなかったことも分かりました」

当日は防災関連の会があり、近隣のキーパーソンたちには集まっただけではありませんでしたが、ボランティアの方たちに参加してもらったことは貴重です。

今後は、ネパール人の若者たちが自分の国を紹介できるようにサポートしたいと思います。

(多文化共生チーム 丸谷士都子)

見逃せない！「あーすフェスタかながわ」

「あーすフェスタかながわ」は、2001年に始まったお祭りです。テーマは「みんなで育てる多文化共生」。今年度は、11月30日と12月1日、JR本郷駅近くの地球市民かながわプラザ(あーすぶらざ)で開催されました。

「あーすフェスタ」ってどんなお祭り？

各国の民芸品を売るワールド・バザール、エスニックな香り漂う世界屋台村、世界の民族舞踊や音楽を披露するステージ、世界の楽器の体験などに加え、みんなで話し合うフォーラムはフェスタのメインイベントの一つです。実行委員会には民族団体、外国人コミュニティ、NGO、神奈川県など20を超える団体が参加し、外国人がゲストとしてではなく、企画に直接関わって作り上げていることが特徴です。

地球の木は、今年もワークショップ部会に企画委員を出し、ネパールチームはネパール紹介コーナーを担当しました。ネパールチームメンバーの他、ネパール人ボランティア、神奈川区多文化共生ラウンジのワークショップに参加したネパールの子どもたち3名も応援にかけつけてくれ、ネパールの文字を教えたり、ネパール文化を紹介したり…。ネパール人が輝いている姿が印象的でした。

なぜ「あーすフェスタ」？

皆さんは長洲元神奈川知事が唱えた「国際外交」という言葉を知っていますか？「平和を担う人々を育てるには、人と人、地域と地域が交流して、互いを理解する必要があります」という長洲さんの考えが県の政策に取り入れられ、神奈川県を真の国際社会にするには、



外国籍県民も権利を守られ、生き生きと活躍できなければならないという流れが「あーすフェスタ」の誕生に繋がりました。

増え続ける外国人とどう向き合う

神奈川県には26万人以上の外国人が暮らしています。その出身国は179か国に及びます。これからも増え続ける外国人とどのように共に生きていくか。一緒にいることで互いを知り、困っていることがあったら一緒に考える。私たち一人ひとりの、こんな小さな一歩から豊かな多文化共生社会が育まれるのではないのでしょうか。(ネパールチーム 乳井京子)

JVCラオスのセコン県での支援活動、これまでと今後



コミュニティー林に看板を設置する村人

セコン県10村でのプロジェクトを終えて

いつもご支援いただきありがとうございます。おかげさまで、セコン県での10の農村で、住民が利用する森や川、土壌といった共有資源(コモンズ)が奪われないよう、住民自身が利用しつつ保全できるよう支援するプロジェクトが3月に完了を迎えます。10村ですべての村の情報をまとめて地図や資料にする見える化や法律研修といった活動によって、みんなの共有資源や村を守ろうという意識が高まりました。なかでも5村でコミュニティー林や魚保護地区を設置し、特段の支障なく村人によって持続的に運用されていく見通しとなり、開発事業による土地収用を拒否したり、環境破壊を防止したりするという例も見られました。そのほか、5村で農業や化学肥料などによる環境への負荷や土壌劣化の低減・防止のため、自然農薬、たい肥づくりを村人と共に行い、一部で自ら実践する例も見られています。

同様の手法で活動を広げる

10村で得られた上記のような成果を他の地域でも実現するよう、現在新たなプロジェクトを形成中です。活動予定地は、同じくセコン県でまだ活動したことのないダックチュンとカルムという2郡です。セコン県中心部からは車で3時間以上かかり、山がちで、森や川からの食料などの採取や焼き畑も盛んに営まれている遠隔の農村地帯です。一方で舗装道路の整備が進み、商品作物のほか、鉱業や発電などの開発事業が入りつつあります。開発の波が押し寄せつつある中、これまでの手法を踏襲しつつ、農村で村人とともに保全や意識啓発といった活動を実施するよう、調査や手続きを進めています。このほか、現在のプロジェクトで得られた成果や同様の取り組みが、県全体などもっと広域で普及するよう、他の郡や県、NGOとの交流や研修といった活動も予定しています。

共有資源を分かち合える社会を目指そう

村人たちが共有資源に依拠し、金儲けなどのために他者から資源を「奪わない」暮らしを送れるよう、そして現代日本でも身近な、インターネットや薬品、技術といった共有資源(コモンズ)を金儲けのために奪って独占するのではなく、むしろ分かち合うよう、社会のあり方を変える動きの一助となるよう、活動を進めてまいります。

気候変動はでっちあげだ、などと言うトランプがアメリカ大統領に再度就任し、国際社会は陣営を形成して紛争に明け暮れ、協調や持続的とは程遠い様相を強めている中、今こそわれわれ市民が諦めず、コモンズをみんなのために使うよう、連帯していくことが肝要です。

(日本国際ボランティアセンター(JVC)ラオス事業担当 山室良平)

イベントに参加 ～幸せクラフトを販売～

●おとな子どもも楽しめる!オルタ館フェスタ

11月1日(金)、11月2日(土)、生活クラブ生協のオルタナティブ生活館を拠点に活動している団体が行うお祭りです。新横浜のオルタ館には親子連れの姿が目立ちました。地球の木は、両日ともラオス、カンボジアのクラフトと絵本『森の歌がきこえる』の販売で参加しました。

また、絵本の読み聞かせや、ラオスの精霊ピーのチャームづくりのワークショップを行ないました。

●かまくら国際交流フェスティバル(大仏まつり)

11月10日(日)、鎌倉を拠点として活動する国際協力団体が集まるお祭りが、今年も鎌倉の高徳院(大仏さま)で開催されました。地球の木も毎年、クラフト販売で参加しています。大仏さまを見ようと多くの海外の観光客も訪れ、とても賑やかな会場でした。いろいろな国のお客さんを相手に、楽しくクラフトを販売しました。

●東日本大震災・復興まつり 共に生きよう! 2024

11月23日(土)、パシフィック横浜臨港パーク・芝生広場

この祭りは2013年から開催され、「支援ネット 神奈川」の一員である地球の木もクラフトなどの販売で



青空にはためくルンタ

参加しています。同じ志を持つたくさんの団体がつながり続け、新たな出会いや嬉しい再会の場所になっています。地球の木のクラフトの販売ブースで、会員の方々とお会いできるのも楽しみです。東北はじめ各地の美味しい食品や産物を食べたり買ったり、またステージイベントではウクライナの女性の歌やアカペラグループの若い方々の歌声を楽しみました。(会報チーム 沼田由美子)

ラオス図書プログラム3年間を振り返って

地球の木会員みなさま、ラオス図書プログラムを応援して下さる方々のご協力が大きな輪となり、3年間の活動を終えることができました。

ラオス現地支援:NPO法人「ラオスのこども」(以下ALC) との連携

ALCは絵本の少ないラオスで、文字を習得し、子どもたちが自ら未来を切り拓く手助けになるよう図書環境向上を目指し活動しています。子どもたちの自立を願うALCに共感し、2022年、地球の木ラオス図書プログラムが始まりました。

この3年間で、ラオス現地でALC現地駐在員の渡邊淳子さんを中心に実施された、「図書を教科に生かす教員研修の実施」や環境教育や文字を楽しく身につけるための3冊の絵本の出版を支援してきました。



地球の木から贈呈された絵本

本で繋がる和、大きく広がるボランティアの輪

日本国内ではご寄付いただいた絵本にラオス語翻訳を貼付し、ラオスの学校図書館に送る活動を行いました。この活動は横浜市教育委員会の後援をいただき、横浜市内の514学校、横浜市内図書館18館にチラシを置かせていただきました。3年間でボランティア参加者はのべ272人、寄付絵本は342冊となりました。

ラオスに渡航される方々には、約60冊の絵本の運搬のご協力をいただきました。また、当初予定していたラオスへの船便がコロナ禍以降再開しないため、航空便送料のご寄付をお願いし、54名の方にご協力いただきました。絵本到着後は、お礼のビデオレターがラオスから届き、ボランティアの皆さんと見ることができました。

プログラム開始時からの行程を思い返すと、数えきれない方々の顔が浮かびます。フリースクールや就業支援団体、小学生から大人まで、プログラム開始当初は予想をしていなかった人の輪が広がり、繋がり、今を迎えています。図書・ラオス・教育というキーワードで集まった仲間と過ご

し、この活動が生涯教育につながることを感じています。大切にしていた絵本のご寄付や、ボランティア活動に時間を割いてくださった皆様に心より感謝いたします。

このプログラムの軌跡を記録に残し、それぞれが次のステップに羽ばたくものになればと、報告書を作成いたしました。ご覧いただけましたら幸いです。

(ラオス図書チーム 相馬淳子)



故郷で始める新しいボランティア活動

裏富士と南アルプス連峰の秀麗を庭越しに目にする当地。ブルーライト横浜から転住し、早や春夏秋冬(ひととせ)過ぎた。傘寿を数え60余年ぶりの里帰り。天寿を全うした母親の遺言もあってのことだが…。そして今は、迫りくる「老い」とこれまた想定外の「おさんどん」が日課になっている。(女もすなる料理というものを男もしてみんとするなり…)ではないが、過去に料理学校で1年間の体験ルポ取材をしたことが、今にして役立っているとは老妻の弁。

そんな生活リズムに新たな目標が加わった。それは俗に言うボランティア活動。地元行政が推進する「男女共同参画推進委員会」の委員。公募によるカップル委員は初めてで、「高齢ハンデ」よりもどうやら共働きの経歴が当局にヒットしたらしい。この公募する動機のひとつには地球の木会員としての体験がある。

話は10数年前に遡る。当時の私はリカレント教育(学び

直し)と生涯学習論に携わり、教える立場にあり、「その実践の場」として、地球の木へのお誘いをMさんから受けた。Mさんは、今も国内外を東奔西走する、まさにボランティアの鑑。私にとってもボランティア活動の原則、自発性、無償性などを学ばせて頂いた存在で感謝しています。

ボランティア活動の元締めであるNPO法人は、国内に約5万団体あると言われるが、いわゆる「ヒト、カネ、モノ」の課題を抱えている。地球の木として他人事ではないはず。とはいえ、「特定非営利」の称号を持つ優等生の地球の木は、定期刊行の会報誌が伝えるグローバルな記事と共に会員の活躍ぶりが伝わってきます。(地球の木は不滅です!)私とて、今は県外にいても「もっと何かできることがないか」と自問し、また「遺贈寄付」もあることだし…。

なお冒頭の裏富士のくだり。富士山を称する歴史用語で、当地とは山梨県を指す。ちなみに、表富士は、静岡県。

(山梨県甲斐市 野崎俊一)

第26回 地球の木総会・報告会のお知らせ

日時 5月24日(土) 13:30～15:00 第26回通常総会
15:30～17:00 ネパール極西部訪問報告会

会場 オルタナティブ生活館2階 オルタリアン

住所 横浜市港北区新横浜2-8-4(新横浜駅より徒歩7分)
詳細は別紙の「第26回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

◀ ネパール極西部訪問報告会 ▶

～地球の木の支援がなかったら、今の私はありません～

地球の木は、ネパール極西部で1997～2009年、ニルマラさん率いるSOARSと共に女性のエンパワメントを目指した教育支援を行いました。終了から17年、女性たちはどのように変わっていたでしょう？本年1月の極西部訪問報告と同時に、現支援地インドラサロワールの洪水被災地の報告もします。

地球の木講座2024 のお知らせ



カタツムリの知恵と脱成長

～豊かさと幸福を問い直す～

「脱成長」の視点から今日のグローバル社会における幸福のあり方について語っていただきます。

日時 2025年3月22日(土) 14:00～16:00
会場 ぴおシティ6F青少年交流・活動スペース(さくらリビング)
講師 中野佳裕さん(立教大学社会デザイン研究科特任准教授)
参加費 500円
定員 50名 詳細はちらし、またはホームページをご覧ください

年末募金2024

幸 せ 分 か ち 合 い 年 末 募 金

＼ご協力いただきありがとうございます！／

今年も会員の皆さまをはじめ、**87名**の方からご協力をいただきました。皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

◆ **年末募金総額…542,500円**

〈寄付先別内訳〉

◆ ネパール..... 176,000円 ◆ ラオス51,500円
◆ ラオス図書 32,000円 ◆ 指定なし..... 283,000円

2024年にいただいたご寄付の領収書を
2025年1月28日に発送いたしました。

活動日誌(12月～2月抜粋)

- 12月
 - 1日 会報97号発行
 - 1日 あーすフェスタかながわ2024 (11月30日も開催)
 - 7日 第6回理事会
- 1月
 - 9～20日 ネパール現地訪問
 - 17日 ラオス図書ボランティア (逗子市フリースクール「ここだね」)
 - 25日 第7回理事会
 - 25日 活動紹介・クラフト販売(みどり国際交流ラウンジでの講演会にて)
 - 28日 デポー展示会(東寺尾)
- 2月
 - 8日 ラオス図書貼付ボランティア
 - 13日・14日 デポー展示会(ひらつか西海岸)
 - 15日 福祉クラブ藤沢センター展示会
 - 24日 第8回理事会



◆30年前、ニルマラさんの「最も重要なのは教育です」という言葉に共感して、地球の木はネパール極西部で12年間にわたる教育支援プロジェクトを行った。今回の訪問で、今も識字教室の卒業生たちは自分や家族の幸せだけを考えるのではなく、他者に貢献するというミッションを忘れずに暮らしていることを知り感動した。ニルマラさんは「一人ひとりの力は小さいけれど、みんなの力を集めれば大きなことを達成できる」とよく言っていた。私たちの、また極西部の村人たち一人ひとりの小さな力が結集して、村々にとつともなく大きな変化が起こっていることがよく解った。(K.N)

